
夕日の中で

美花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕日の中で

【Nコード】

N4422B

【作者名】

美花

【あらすじ】

女の人と、女の子のお話。よければどうぞ読んで下さい。

今日、彼氏にフラレた。

もう哀しみも悔しさもなくて…

ボーっとしてた。

なんで、フラレちゃったんだろう

私がしつこかったから？

面倒くさい女だから？

そんな事、はじめから知ってるよ。

だから、誰にもほんとの自分なんて見せたくなかったんだよ

なのに

隠してたのに

ほんとの君が見たいって言ったのは貴方じゃない

ただの興味本意だったの？

そんだけの事で、心の奥底で膝抱えてビビってる私を引きずりだしたの？

ひどいよ

酷い

人なんか、信じるんじゃないかった

あんななんか信じるんじゃないかった

ちゃんと分かってる

どんなけ責めたって泣いたって

結局あんたを好きになっちゃった私の負け

もうどうしようもない

改めて自覚したとしても

貴方はもういない

「私」
もういない

死んじゃった

貴方に殺された

貴方のたった一言で

やっぱ、こんなに脆かったんだね

今さら実感するなあ

…

私…

一生幸せにはなれないの？

突然、涙が出てくる。

ほんとに突然。

今まで失恋経験と言うか恋愛経験が少ない私は、驚いて涙を拭う。

涙を拭う

涙を拭う

全く意味が無かった。

苦笑い

楽しくて嬉しくて

笑う事が出来ないから

苦笑いしかできなかった

ボーっと座っていると

小さい女の子がやってきた。

手に可愛いクマのぬいぐるみを持ってる。

「おねえちゃん、どうして泣いてるの？」

女の子は綺麗な眉を歪めて、心配そうに聞いてくる。
この子は将来かなりの美女になるな

「どっかいたいの？」

ううん

あ…

うん、痛いの

胸がね、ズキズキするの

治したいんだけどね、治し方が分からないの

女の子は静かに聞いてくれている。

凄くズキズキして、どーにもならないの

「おいしやさまに見せても、ダメなの？」

私は少し微笑んで、お医者様には治せないんだよ、と言った。

すると女の子は暫く難しそうな顔をして悩むと、閃いたようにニコッと笑った。
わぁ、可愛い

「あのね、とってもいいおまじないを教えてあげる!」

おまじない？

「うん、ママがずっと前にミウに教えてくれたの」

ミウ？

「ミウはミウのことだよ」

良く分からないけれど、多分この子の名前なんだと思う。

へえ、どんなおまじないなの？

「あのねあのね!」

そう言いながらミウが顔を近づけてきた。

内緒話のように言うのかと思って、自分の顔も近づけてみる。

するとミウは、私のおでこにチュッと軽いキスをした。

私が驚いて目をパチクリしていると、ミウは目をつむって祈るように指を組んだ。

え？

「私の残り少ない命をこの子に…私のささやかな幸せを全てこの子に…永遠に授けたまへ…」

残り少ない…命？

子供らしからぬ言葉に目を見張っていると、ミウは目をあけてフワと微笑んだ。

「ミウちゃん、それ…」

「これはね、ママがいなくなっちゃう前日にママがミウにしてくれたおまじないなの」

ママがいなくなっちゃう…？

残り少ない…命…

私はどういう意味なのか考えついて、真っ青になった。

「ミウちゃん、ママ、いなくなっちゃったの？」

ミウは少しうつ向いて、

「ずっとむかしになくなっちゃった。ママもパパもと呟いた。」

私はとても悲しくなって、ミウちゃんの頭を撫でた。フワフワの毛が指をくすぐる。

「それは、寂しいね…」

ミウは顔をあげて私の目を見た。

「おねえちゃんも、寂しいんでしょう？」

時が止まった気がした。

「ミウね、初めておねえちゃんを見た時、ママがいなくなっちゃった時のミウにそっくりだと思ったの」

私は何も答えられない

「おねえちゃん、ポロポロ涙ながしてたけど、心のずっと奥でもポロポロ泣いてたんでしょ？」

どうして

「おねえちゃんの中の子、寂しいって泣いてるよ」

「外にだしてあげないと、その子ずっと一人ぼっちだよ」

私はどう答えれば良いのか困ってただ呆然とその子供を見つめていた。

「ミウちゃん…ミウちゃんは怖くなかったの？外に出て…怖くなかった…？」

ミウはまたニコッと笑った。

「外にはね、怖いものなんてなーんにもないんだよっ」

え…

「だってね、お日様はポカポカあったかいし、雨はピチャピチャ楽しいし、曇りはピューピュー涼しいし、みんな笑顔だよっ」

笑顔？

ミウは、うん、と頷いてそのままクルッと振り返った。

「あのおねえさん、笑ってるでしょ」

ミウが指差した女の人は、電話をしながら微笑んでいる。

「あのおじちゃんも、笑ってるでしょ」

ミウが指差した先には、頭が薄くなりかけたおじさんが、花束片手にニコニコしている。

私が良く見渡せば、まわりには幸せそうにしている人がたくさんいた。

「みんなみんな、『外』に出てるから笑ってるんだよ」

ミウが私を見て笑った。

ああ、そうか

みんなほんとの自分を出してるから

あんなに幸せそうなんだ

やっと幸せになる理由

分かった

「ミウちゃん…」

「おねえちゃん、もう怖くないでしょ？悲しくもなくなったでしょ？」

私は微笑んで、頷いた。

ミウが帰っていった後、私はそのままノンビリ夕日を眺めてた。

そうだね

そろそろ、座り疲れてきたし

歩き出さないとね

私は立ち上がって、歩きだした

幸せを見つけるのまだまだ先だろうけど…

もう、怖くはない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4422b/>

夕日の中で

2010年11月25日17時19分発行